

シリーズ「キリストの花嫁」No.3

ブライダル・パラダイム (2)

【聖書箇所】 詩篇 27 篇 4 節

ベレーシート

●今回は、シリーズ「キリストの花嫁」の第三回目です。神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点から見る見方を「ブライダル・パラダイム」と称して、今回は、花嫁の霊性の特徴についてお話ししました。その霊性の特徴は、何よりも神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界であり、主の前にすわって主の語られることばに耳を傾けるというマリヤの霊性、あるいは、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で思いにふける、そのために。」と歌った「ダビデの霊性」ともつながるのです。

●昨日の「サムエル・ミニストリー」(7/11)ではマラキ書の2章を瞑想しました。マラキ書は旧約聖書の最後にある預言書です。この預言書が書かれてからバプテスマのヨハネが現われるまでの約四百年間、預言者を通して主のことばが語られることはありませんでした。この神の沈黙が何を意味するのか。神のご計画においてはそこにも秘められた必然性が隠されているはずですが。しかしそれはともかくとして、マラキ書の中で糾弾されているのは「祭司たち」だということが重要なのです。なぜなら、本来の「祭司の務め」は働くことではなく、神の臨在の中で過ごすこと、神を仰ぎ見、顔と顔を合わせて、神を知ることだからです。

●「祭司」と同時に「王」の務めは、人間が神によって創造された時から人間に与えられた務めです。最初の人アダムはエデンの園においてその務めを果たしていたのです。そもそも人間は神のかたちとして造られましたが、その神のかたちとは三位一体なる神が持っているかたちです。そのかたちとは愛のかかわりであり、それは互いを知るという関係です。三位一体なる神(御父・御子・御霊)の揺るぎない永遠の愛の交わりこそ神のかたちであり、そのかかわりに似せて人が造られたとすれば、人にもその務めが反映されていることは言うまでもありません。その務めを別なことばで言うならば、「祭司としての務め」と「王としての務め」なのです。後に、神の民イスラエルが「王である祭司」、あるいは「祭司の王国」と呼ばれるのはそのためです。「祭司の務め」と「王の務め」が健全に果たされるべく立てられたのが後に登場する預言者です。これら三者の務めが正しく機能することによって神の創造のみこころが地上になされるのです。人間の「祭司としての務め」とは、「顔と顔を合わせて」(Face to face/「パーニーム・エル・パーニーム」 פְּנֵי אֱלֹהִים)神と過ごすこと、神を仰ぎ見ること、神を知り、神に愛され、神を愛



することです。この「祭司の霊性」が、「ダビデの霊性」「マリヤの霊性」「花嫁の霊性」とも深く密接につながっているのです。つまり、これら四つの霊性はみなひとつにつながっていることを、今回、頭に置いていただきたいのです。

●神の民が「祭司としての務め」を回復することによって、はじめて「王としての務め」を完成させることができるのです。その逆ではありません。神のみこころにかなった「祭司の務め」があるところに、神の代理者として「治める」という「王としての務め」が成り立つのです。「王の務め」の特権は単に人(民)を支配するという意味ではあまません。神の秘密(奥義)を知り、それによって、神の支配を完成させる務めなのです。「祭司の王国」、「王である祭司」という表現は、神への務めとして密接な関係があるのです。

「あなたがた(イスラエル)はわたしにとって**祭司の王国**、聖なる国民となる。」(出エジプト 19:6)

「あなたがたは、**王である祭司**・・・とされた民です」(I ペテロ 2:9)

「私たちが**王国**とし、ご自分の父である神のために**祭司**としてくださった方である。キリストに栄光と力が、とこしえにあるように。アーメン。」(黙示録 1:6)

●「王であり、かつ、祭司としての務め」を果たした最初の人**は**アダムですが、モーセもその一人です。彼は神の民の指導者である前に祭司でした。「【主】は、人が自分の友と語るように、**顔と顔を合わせてモーセに語られた。**」(出エジプト記 33:11)とあります。彼は 40 日間も主の山で過ごした人です。そして神の教え(トラー)が彼を通して与えられたのです。それゆえモーセには神の権威と神の力が賦与されていました。神の民イスラエルが主を礼拝するために「幕屋」が建造されましたが、そこで「祭司としての務め」を任じられたのはレビ族です。ヤコブの子どもたちの中で「レビ」は三番目の子です。「レビ」という名の意味は、母レアが「今度こそ、夫は私に結びつくだろう。」と言ってつけた名前です。ネーム・セオロジーの視点から見ると、「レビ」(「レーヴィー」**לֵוִי**)という名前には「**神と結びつく**」「**神と一体となる**」という意味が隠されています。祭司たちはこのレビの系譜にある者たちであり、実はモーセもその系譜の中にいた人です。レビ族はこの務めのために、他の部族とは異なる務めがゆだねられていました。従って、目に見える土地という嗣業は彼らには与えられていません。むしろ彼らの嗣業は、神ご自身なのです。そこには神とのかかわりにおいてきわめて重要な、永遠の務めとしての「型」があるのです。

●前置きが長くなりましたが、今の段階では、キリストの花嫁に秘められた啓示をランダムに(示されるままに)取り上げているだけで、まとまった形全体には至っていません。しかし、示されたまを語って行きたいと思います。これまでのことは、「キリストの花嫁の霊性」がダビデやマリヤ、そして祭司の霊性につながっていることを知っていただくためです。そのことを念頭に置きつつ、今回の「ブライダル・パラダイム」(2) で取り上げようとしていることは、花嫁がいつの日か花婿と「顔と顔を合わせる」日を待ち望むという姿勢(ライフスタイル)です。

1. 顔と顔を合わせて見る日まで

●待ちに待った結婚式で、花嫁はベールを顔にかけたままで入場して来ます。花嫁のベールを上げることのできるのは花婿だけです。花嫁がベールを上げられた状態で入場してきたとしたらどうでしょう。私の結婚式の時がそうでした。

た。これは、挙式する私たちも、そして司式者も、そして周囲の者たちも結婚の奥義について全く無知であった証拠です。今は笑い話になっていますが……。パウロはこの結婚の奥義を次のように述べています。

【新改訳改訂第3版】Iコリント書13章12節

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には**顔と顔を合わせて見る**こととなります。

今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知る
こととなります。

●私たちの救いの究極的な目的は、「神の御顔を仰ぎ見る」(黙示録22:4)ということです。花嫁の究極の喜びは、花嫁といつの日か、「顔と顔を合わせて見る」ということです。では、現在は「顔と顔を合わせて見る」ことはできないのでしょうか。いいえ。完全ではなくても、「ぼんやり」と見ることはできるのです。「一部分」を知ることができるのです。とすれば、ぼんやりであっても、花嫁の顔を慕い求めようとするのは自然です。主の隠された秘密の一部分ではあってもそれを求めるのは自然であり、花嫁に与えられている喜びなのです。その喜びを日々経験することは、花嫁を待ち望む思いはより増してくるのです。そうしたあり方、生き方は、ある意味において、主をあかしする力となります。周囲の人々に大きな影響を与えることになるに違いありません。いろいろな催しをして人々を教会に集めたとしても、花嫁の喜びを味わうことがなければ、やがて人は去って行きます。なぜなら、真の希望と信仰と愛が結びつかないからです。生きる力を生み出すことができないからです。

●前回の「ブライダル・パラダイム(1)」で、主を「尋ね求める」、主を「求める」ことこそ、花嫁の霊性なのだということを述べました。今回も、詩篇27篇をもう一度味わってみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】詩篇27篇4節、8～9節

4 私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。

【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

8 あなたに代わって、私の心は申します。「わたしの顔を、慕い求めよ」と。【主】よ。あなたの御顔を私は慕い求めます。

9 どうか、御顔を私に隠さないでください。

※8節の「あなたに代わって、私の心は申します。」とは「主の言葉を借りて言います」という意味(フランススコ会注解)。

※9節で、ダビデが「どうか、御顔を私に隠さないでください。」と願ったのは、ダビデが主の御顔を仰ぐことが力をもたらすことをよく知っていたからです。)

●これらの節だけでも、「渴望用語」—「希求用語」と言える語彙(動詞)を以下のように多く見出すことができます。

(1) 「願った」……「シャーアル」(שָׁאַל)

(2) 「求めた」……「パーカシュ」(פָּקַד)×2回

(3) 「仰ぎ見る」……「ハーザー」(הִזָּהַר)

(4) 「思いにふける」(新改訳)=「尋ねきわめる」(口語訳)=「朝を迎える」(新共同訳)……「**バーカル**」(בָּקַר)

(5) 「(主の御顔を)慕い求める」……「パーカシュ」(פָּקַד)×2回

●これらの渴望の目的は、4節においては「主の家に住み」、そして「主の麗しさを仰ぎ見る」ことです。8～9節では、「主の御顔を慕い求める」ことです。花嫁の美しさは、花婿をひたすら慕い求めるところにあります。その花婿の御顔を慕い求めることから離れることは、ぶどうの枝が幹にとどまっていなかったことを意味します。イエシュアが最後の晩餐の席で、これから地上に残される弟子たちに語られた説教の中で、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」と言われました。これは花婿を待つ花嫁にも適用できると思います。花婿を慕い求める愛は、その花嫁を最も美しくするのです。

●このことが教会において最も強く表われるのは「聖餐式」においてです。ところが、今日のキリスト教会は、その聖餐にあずかることのなかに、その喜びが喪失しています。イエシュアの十字架の上で流された血潮は(血の杯)は、ブライダル・パラダイムからすると、御子イエシュアの驚くべき求愛行為なのです。ぶどう液に象徴されるその血潮を飲むという行為は、その求愛行為を受け取ったことを意味します。つまり、そこで婚約が成立し、将来の結婚を約束し合ったことを意味するのです。聖餐式は自分がキリストの花嫁となったことを思い起こすときであり、やがて迎えに来られる花婿の顔を慕い求める生き方を新たにする時なのです。しかし、ブライダル・パラダイムが希薄であるために、聖餐にあずかることがさらなる主の御顔を慕い求めることにつながっていきません。それには理由があります。その理由の一つは、ブライダル・パラダイムが明確でないことに起因しています。ブライダル・パラダイムを持つためには、聖書が語っている「その日(主の日)」についての正しい理解、つまり、終末についての知識が不可欠なのです。その知識が欠落しているなら、ブライダル・パラダイムをもって生きることが希薄になります。ブライダル・パラダイムは「御国」のパラダイムそのものなのです。「御国の福音」と「キリストの花嫁」の概念は密接な関係にあるのです。これからのキリスト教会は、「御国の福音」と「キリストの花嫁」の概念をより明確にすることが求められているように思います。聖書が「御国」の視点から解釈される時、これまでの解釈とは異なったものが見えてきます。と同時に、教会が「キリストの花嫁」という視点から見直されると、今、教会が何をすべきなのか、また、それをいつどのようにすべきなのかが見えてくると信じます。

2. 花嫁が花婿の御顔を慕い求めるための聖別された「時」

●聖書の中で主の御顔を慕い求めた者たち、主と「顔と顔を合わせる」ことのできた人々には、共通したライフスタイルがあることを、これからお話ししたいと思います。先ほどの詩篇 27 篇 4 節を新改訳と新共同訳で読み比べてみます。

【新改訳改訂第3版】

私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。

【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

【新共同訳】

ひとつのことを主に願い、それだけを求めよう。命のある限り、主の家に宿り／主を仰ぎ望んで喜びを得／

その宮で朝を迎えることを。

●太文字&下線の部分に注目してください。「**思いにふける**」(新改訳)と訳された語彙が、新共同訳では「**朝を迎えること**」(新共同訳)と訳されています。なぜそのような訳になるのでしょうか。その箇所は「バーカル」(בָּרַק)というヘブル語動詞が使われているのですが、動詞「バーカル」には「注意深く調べる」という意味と、「思いにふける」「考え直す」「伺いを立てる」という意味があります。しかしこの動詞の意味からは新共同訳のような意味は出てきません。おそらく、新共同訳は「バーカル」の名詞「ボーケル」(בֹּקֶר)から「朝を迎えること」と訳しているのではないかと思います。ところが、ブライダル・パラダイムから見ると、この訳はとても大切なことを示唆しているのです。というのは、主の御顔を慕い求めた者たち、主と「顔と顔を合わせる」ことのできた人々の共通したライフスタイルは「朝」と関係があるのです。つまり、彼らの多くが「朝」に主と出会っているのです。

●詩篇 63 篇 1 節を見てみましょう。

【新改訳改訂第3版】詩篇 63 篇 1 節

神よ。あなたは私の神。**私はあなたを切に求めます。**
水の無い、砂漠の衰え果てた地で、
私のたましいは、あなたに渴き、
私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。

●詩人の渴きは尋常ではありません。主を求めるその渴望は「私はあなたを切に求めます」という表現の中に隠されています。以前、この箇所にある「切に」という訳が「朝早く」と訳することができることを知りました。ヘブル語の知識のない者にとっては、どうしてそういう訳になるのかが分からないはずですが、しかしその「切に」と訳されたヘブル語の「シャハレ」(שָׁחַל)という動詞をヘブル語辞典で調べることにより、それが「熱心に求める、熱心に捜し求める」という意味であることがわかります。しかも、その名詞が「シャハレ」(שָׁחַל)が「暁」「夜明け」という意味をもっていることがわかるのです。つまり、旧約の人にとって、主を熱心に捜し求める時は「暁」「夜明け」の時だと分かるのです。詩篇 63 篇の作者の「切に求めます」とは「夜明け」に主を探し求めているのです。なぜ、「夜明け」なのでしょう。

●これは、この詩人だけでなく、主を求める者たち、主と顔と顔を合わせた者たちが、「朝」「夜明け」の頃に主の現われを経験しているからです。朝は主との密会の時なのです。しかも主と出会う最良の時なのです。主がご自身を顕わしてくださる時なのです。**朝は一日の中で最も重要な時**なのです。これは私の経験から言っても「アーメン」と言えます。私の「牧師の書齋」には多くのコンテンツが含まれていますが、その最初は「詩篇の瞑想」でした。その内容をブログとして投稿しはじめたのは、今から 10 年前、2005 年の冬からでした。朝の 2 時、3 時に起きて 2 時間ほど、毎日、詩篇の瞑想を続けたのです。それから 3 年ほどして、詩篇の瞑想にはヘブル語の知識が必要であることを悟って、本格的にヘブル語で神のみことばを味わうようになっていったのです。

●朝はだれにも邪魔されない時であり、主と主のことばに深く沈潜できる最良の時であり、一日の中で最も重要な主の訪れの時なのです。そのことを示す例を見てみましょう。その前に、聖書のいう「朝」とは「第四の夜回り」のことで、今日の午前 3~6 時頃までを言います。

(1) モーセ

【新改訳改訂第3版】出エジプト記 34章 1～3節

- 1 【主】はモーセに仰せられた。「前と同じような二枚の石の板を、切り取れ。わたしは、あなたが砕いたこの前の石の板にあったあのことばを、その石の板の上に書きしるそう。
- 2 朝までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。
- 3 だれも、あなたといっしょに登ってはならない。

(2) ヤコブ

【新改訳改訂第3版】創世記 32章 24～28節

- 24 ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した。
- 25 ところが、その人は、ヤコブに勝てないのを見てとって、ヤコブのもものつがいを打ったので、その人と格闘しているうちに、ヤコブのもものつがいははずれた。
- 26 するとその人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明けるから。」しかし、ヤコブは答えた。「私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらなければ。」
- 27 その人は言った。「あなたの名は何というのか。」彼は答えた。「ヤコブです。」
- 28 その人は言った。「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたは神と戦い、人と戦って、勝ったからだ。」

(3) イエシュアの弟子たち

【新改訳改訂第3版】マルコの福音書 6章 46～51節

- 46 それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。
- 47 夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。
- 48 イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。(「通り過ぎる」とは主の顕現の表現)
- 49 しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声をあげた。
- 50 というのは、みなイエスを見ておびえてしまったからである。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。
- 51 そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。

●他にも、多くの例を聖書に見出すことができます。ちなみに、イエシュアの祈りの時はいつもまだ暗い時(早朝)でしたし、復活も早朝でした。特に、神(主)がこの地上で私たちに現われて下さる時は早朝なのです。それゆえ、キリストの花嫁である私たちは、主が訪れてくださる特別な時間として「朝」(「ポーケル」בֹּקֶר)を聖別しなければなりません。最後に、以下の詩人の声に耳を傾けて終わらしましょう。

【新改訳改訂第3版】詩篇 5篇 3節

【主】よ。朝明けに、私の声を聞いてください。朝明けに、私はあなたのために備えをし、見張りをいたします。

●私は、この「朝明けの備え(=見張りとしての務め)」を「モーニング・ウォッチ」と呼んでいます。キリストの花嫁のライフスタイルは、この「モーニング・ウォッチ」を力の源泉の時として、日々、聖別することではないでしょうか。〔2015.7.12〕